

利き手と打撃フォームの関係性の研究
A study of relation between the dominant hand and the batting form

1K07A211-7

溝口 真史

指導教員 主査 葛西先生

副査 小野沢先生

<緒言>

近年、イチローや松井に代表されるような左打ちの好打者が数多く活躍していることは周知の事実である。そんな彼らに代表される左打ちは、最近では少年野球や高校野球をはじめとする世代でも珍しくなくなっている。私が小学生だった当時の甲子園出場選手と今の選手を比較しても格段に左打者の割合が増えたことがうかがえる。しかし、同じように左投げの選手が比例して増えるような現象は見られない。これは単に守るポジションが少なくなるという理由だけではなさそうである。投手や打者に限らず「左」というものは有利であるという概念は私たち選手や指導者を含め少なからず存在している。他のスポーツにおいても同じような認識はあるように思う。そこで、野球における純粋な「左」打ち（左利き）の選手と上記のような理由から意図して左打ちにした（させられた）選手には何か技術的もしくは精神的に何らかの差異が生じているのではないかという疑問が生じた。本論文はその課題を解明するために取り組んだものである。

<方法>

実験は母校である須磨翔風高校のグラウンドをお借りして、2年生と1年生の右投げ左打ちの野球部員計16名を対象に行った。ハイスピードカメラとマルチスピードテスターを使い、カメラから打者までの距離は9メートル、テスターから打者までの距離は1メートル80センチで実施。バットはSSKモデルのSUPER NEW CONDORで長さ83センチ、直径6.7センチのものとローリングスモデルのXB805で長さ82センチ、直径6.67センチの2本を使用した。一人3スイングしてもらい、スイングスピードとその映像を撮影。フォームを撮影している間に、別途作成した用紙に利き手を使う作業面と、実際に打つ際の感覚的・心理的側面をいくつかの質問をもとに回答してもらった。

<結果>

私のようにある程度左に物事を依存している選手の割合が極端に少なかった。唯一の左投げである選手も、それ以外の文字や箸は右利きである。14名の選手は左打ちという部分で「左」という

キーワードに当てはまるものの、他の投げる・蹴る・書く・持つ（掴む）という動作においては左を右に比べて使用しないことがわかった。さらに、このデータ上では打つこと以外はほぼ右利きに分類される選手が、こと打撃においては左利きの選手と同等に扱われてもおかしくないという部分がある。それは左で打ち始めた時期が極めて早い、つまり野球を始めた頃からボールは右手で投げ、バットは左（打席）で振っていたということだ。

<考察>

今回は調査結果を参考にする限り、純粋に左利きと呼べるような選手はほぼ皆無といえそうである。その中でこれだけ左打ちの選手が多いというのはかなり特異な状況かもしれない。私が同じ野球部に所属していた頃とは、随分と様相が変わってしまった。これだけ右利きであるにも関わらず左打ちが多いというのは昨今の高校野球界においては珍しくなくなっているのだろうか。生活上暮らしていく過程と同じなら右打ちのまま野球をやるはずの選手が、なぜ左打ちなのか。これには野球に限らず多くの場面でヒントが隠されているように思う。真っ先に考えられるのが、イチロー選手や王貞治氏などに代表される華のある選手の存在。第二に、野球というスポーツをやるルール上純粋にホームベースから一塁までの距離が短くなり、右打者より優位に立てる点。第三に対投手との関係性において、必然的に多数を占めることになる右ピッチャーに対して、より長くボールが見える、もしくは出所をコンマ何秒でも早く視界にとらえることができる長所があるからだ。

<結論>

私が、高校球児だった頃より数段増えた左打者の中に理論上左利きかつ左打ちという選手が一人もいなかったことは、左打者人数の増大に比例しない寂しさを感じた。生粋の～という言葉が以前から使われることがあるが、作為的に生み出された左打ちではなく、根っからの利き手を鍛錬させた左打者の台頭を心待ちにしている。「左」というキーワードが、野球を含めたスポーツ界でそう簡単には浸食されないということを、人間の身体的神秘が証明し続けることを切に願うのである。